

西方の史料にも此の間の消息を語るものが無いではない。即ち一〇三一年に書かれたと認められる Albiruni^③の書には、印度や支那や Taghazghaz (即ち當時高昌に據つた回鶻) に、當時 Saman の残りが居り、クフラサン (Khurasân) の住民は之を Shaman^{an} と呼ぶと見える(語尾の an は波斯語の複數語尾である)。

回鶻が高昌を奪つた頃から、別に甘肅省の諸地、即ち甘州・沙州等にも其の一部のものは據つて居たが、此等の諸部でも宋代には佛教の信仰が行はれ、大中祥符の末(1016)には沙州の回鶻が表して金字藏經を請うた事があり、^④景德四年(1007)には甘州回鶻が尼法仙等をして來朝せしめ、宋では法仙に五臺山に遊ぶことを許した。又僧翟を遣して入朝せしめ、京城に於て佛寺を建て、聖壽を祝せんとし、名額を賜はらんことを求めたが許されなかつた。^⑤熙寧元年(1068)にも入貢し、金字大般若經を買はんことを求めたが、墨本を賜ふたことも見える。^⑥遼の咸雍二年(1067)に西夏の李諒祚が使を遼に遣して回鶻僧を進めたこと^⑦が見えるが、此の僧侶は此等甘州沙州地方の回鶻僧であつたらうと思はれる。

此等の記事は記録の上から見て回鶻に遅くも宋代の初頃からは佛教の行はれたものであつたらうと推察せしめるものであるが、一方に其の實證として、所謂回鶻文の佛典なるものが今世紀の初以來新疆の沙の中や寺院や敦煌の佛洞から澤山見出された。併しながら此等の佛典には其の年代を記載して居るものが極めて稀であつて、従つて回鶻の佛教に關する歴史的の研究を施すに當つては、非常に困難を感じしめる。

前に述べた通り、記録の上から見ても宋代には回鶻の間に佛教の行はれて居つたものと認得らるゝが、唐代に於